

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

60

嫁にきて四年目の昭和五十四年、姑が脳梗塞で倒れた。五十九歳であった。この日から家族ぐるみで大船渡病院への送り迎えが始まった。住田病院に荻原先生が来てからは、そこでの診察など、夫や私が仕事を休んで母に付き添った。

平成二十年十二月十九日、脳梗塞に肺炎を併発して住田病院に入院していたが、今年一月五日、病院からの急変の知らせに急いで駆けつけたが、間に合わなかった。厳冬の季節には珍しく穏やかな日だった。

「ばあさん、あとはいんだ、いいんだよ。頑

張ったな。家に行くべしな」と、つぶやくように語りながら母の目を閉じると、涙が溢れてきた。三十年の闘病生活、苦勞しながら四人の子どもを育ててきた八十七歳の人生であった。

六合目、七合目が大変で肩で息をしていたが、まもなく見晴らしのいい平坦な場所に出た。海が見える。太平洋だ。眺めを樂しみながら小休止すると、幾分疲れがとれたような感じがした。最もきつかったのは八合目だった。

「い眺め」が待っている。「安堵と日常からの解放感」もある。やはり山はいいのだ。

平成十五年五月十一日、山の仲間たち五十五人で櫃取湿原を訪ねた。北上山地のほぼ中央、岩泉町と川井村との境に、湿原を取り囲むように広葉樹の森が広がる。西間薫さんがこの森を案内してくれた。地面に

「倒木更新」のこと

住田町上有住 金野 きよ子

合目で、そこを抜けると平坦地に出、やがてシャクナゲ山荘に着いた。山頂部から湧き出る冷たい水は、何とも形容しがたいおいしさだ。

日枝神社で早めの昼食をとり、原生林へと向かう。右手にとこまでも広がる太平洋、左手には雄大な奥羽山脈の山々が見える。原生林に踏み込むと、そこは色、におい、

すっかり山に魅了され、秋田駒ヶ岳、岩手山、焼石岳、八甲田、鳥海山、栗駒山に登ることとなる。夫は「山(五葉地区)にいて、山に行くのが何がいい」と言う。

「何も考えない、頭の中を空っぽ」にして、自分を「無」にすることができ。それだけにとどまらない「自然の神秘さ、美しい花、素晴らし



会社の仲間たちとの五葉山登山。日枝神社前で記念写真。左から2人目が筆者(平成10年6月)

つかりと私を育ててくれたことと重なり合う。生かされていることの感謝の念が、父、母そして夫、二人の息子と過ごしてきた家族の肖像を思い出させてくれる。

【執筆プロファイル】一九五二年生まれ、住田町上有住在住。主婦。家庭菜園を樂しむ。花の鉢植えを大切に育てる。会社勤めの時に十分にできなかった婦人会活動に参加している。